

無文字言語の文字化と聖書翻訳について

虎川清子

世界には文字化されていない言語が残されており、少数民族と呼ばれている人々によって伝達手段として用いられている。これらの言語は残された、あるいは隠された言語とも言われるが、その理由には地理的、政治的、宗教的な諸問題があると思われる。2005年のEthnologue（15th ed.）によると全世界の言語数は6912で、そのうちの約三分の一は文字を持たない。ウイクリフ聖書翻訳協会はそれらの人々に母語で読める聖書を提供しようと活動を進めてきているが、その主なプロセスにおける言語学的な諸分野との関係を誌面をお借りして簡単に報告させていただきたい。

1. 言語調査
2. 言語採集
3. 言語分析
 - 3.1. 音声
 - 3.2. 文法
 - 3.3. 意味
4. 文字作成と決定
5. 識字教育用教科書作成
6. 辞書作成
7. 聖書翻訳
 - 7.1. 初稿
 - 7.2. 理解度審査
 - 7.3. 逆訳
 - 7.4. 標準訳審査
 - 7.5. 団体審査
 - 7.6. コンサルタント審査
 - 7.7. 調整
8. 印刷、出版

上記は主な流れであるが、同時並行で進む場合が多い。たとえば6の辞書作成は2と3が常にならなければならないし、7の時点で発見した語を加える場合がある。各プロセスについて簡単に説明を加える。

1の言語調査であるが、言語の存在と使用している人の数、地域、他の言語、特に国語との共通度を調べ、翻訳プロジェクトの必要の有無を決定する。その決定に基づき、プロジェクト担当者が決められ、行政者とその言語を話す人々の代表者と話し合い、担当者（二人あるいは家族）がその地域に住んで働きをはじめても良いか許可を得る。ビザの発給や政府への報告義務について相互確認をする。

2では、その地域での生活を通して諸分野の言語採集をするが、手段としては会話を聞き取り、録音し、記録（国際音声記号による）することが主体である。担当者は日常生活で文化観察を兼ねながら、挨拶や、指差しで物体の名前を尋ねたり、動作によって得られる語から抽象語へと採集を進める。モノリンガルの場合とわずかも国語や地域共通語の理解者がいるのでは速度が非常に違ってくる。電気の無い場合が多いので電池のテープレコーダー使用とノートやカードが使われる。ある程度の量が採集できた段階でコンピューターの使えるところに持ち帰り、採集資料の整理や分類をする。

3は採集のときに意識して下記の点を同時並行で分析していく。

3. 1. の音声については、自然な抑揚、リズム、音の種類を録音し発声して書き取る。音韻分析の基礎資料をまとめ、音韻ルールを見出し、音素の同定をする。

3. 2. の文法については単語を形態素に分け、品詞、動詞構造、構文などの種類を探る。置き換えをしたりして仮説をたて、語順その他を確認する。文法ルールを図表にまとめる。

3. 3. の意味というのは3. 2. の形態素を決めるときの判断材料になるものであるが、各形態素の意味と機能を同定する作業となる。各語の第一義的な意味から熟語まで例を多く必要とするが、入手できたものから記録し保管していく。3. 2. と3. 3. で得たものは前述のように辞書作成の基礎資料となる。この段階ではコンピューターのプログラムが助けとなる。

4の文字作成では音韻分析と音韻ルールの発見をもとに決定された各音素に合わせた文字、アルファベットを考案する。人々の将来の教育を考え、独自の形ではなく国語の文字に似た形のものを試案として提示し、人々の意見を聞き、決定していく。ただし独特の音素の場合は工夫が必要である。決定までに数年かかる。

5では音声が目に見える文字となる経験を理解と共に人々が得るために、絵入りの文字対比識別などの入門書と入門指導書や、日常生活の場面や親しんでいる民話などを題材に識字教育教科書を作成し、指導者を訓練する。その後、識字クラスを開設し、希望

者に読み書きを指導する。

6の辞書作成は2や3で得られた資料を用い、アルファベット順か項目別に整理し、各語の意味の種類を第一義的なもの、派生的なものや熟語に分け、例文を加えて必要なら文法的説明も加えていく。古語や現代語の区別もチェックする必要がある。すべてその言語で作成する場合と、国語や地域共通語を説明に加える場合がある。

7の聖書翻訳は4で文字がほぼ決定してくる時期に始められるが、翻訳原則は、正しく（原意に忠実に）、わかりやすく（聞いてわかるように）、自然に（翻訳調でなく）、首尾一貫（原語が同じなら同一訳語を当てる）してという四つである。主なプロセスは次のようである。

7. 1. の初稿づくりは、旧約聖書を訳す場合は原文のヘブル語、新約聖書の場合はギリシャ語と、各種の英語訳、その国の国語訳があるときはそれと、翻訳者の母語の聖書を比較し意味を調べ、翻訳協力者であるその言語を話す人に意味を説明し、協力して出来る。

7. 2. はナイーブチェックとも呼ばれ、翻訳者と協力者で理解できた訳が、他の人も同じように理解するかを確かめるもので、男性、女性、宗教的背景の異なる人や年齢の違う数人に読んで聞かせ、質問して答えを確認する作業である。

7. 3. では7. 2. で調整したものを英語に直訳するもので、バックトランスレーションとも呼ばれる。語の選択や意味のズレをチェックできることと、その言語を知らない翻訳コンサルタントが原文（ヘブル語、ギリシャ語）と比較するとき使用される。

7. 4. のチェックはすでに各種の訳（団体訳、個人訳、直訳的なものや意識的なものなど）を持つ英語訳の中から RSV (Revised Standard Version) を標準訳として7. 3. の英語直訳と比べ、意味のズレや訳し落としがないかなどを調べる。

7. 5. はコミュニテイチェックとも呼ばれ、7. 4. で英語の調整に合わせた言語訳を少なくとも二、三のグループに読んでもらい、質問して意味の理解、文の表現やつながりを滑らかにする。

7. 6. ではほかの言語での翻訳経験のある翻訳コンサルタントが、調整された7. 3. の直訳的英語を読み、釈義（原文の意味）や訳文のズレ、訳し足りない点、文化的に誤解を招く恐れのある部分などを指摘し、翻訳者と協力者に質問して確認する。

7. 7. の調整は各段階でなされるがここでは最終調整となる。翻訳コンサルタントからの質問で多数の意見を聞いたほうが良い部分などをそれまでかかわったことの無い人々に尋ねて確認をする。

8 の印刷、出版では、原文との文化や自然の相違で訳文だけでは理解できにくいものを絵で入れたり、欄外註や地図をつけたりして印刷製本する。文字の大きさや表紙の色、デザインなど地域の芸術家の協力を得る。

新約聖書は27の書から出来ているので、各書でこのプロセスを繰り返す。旧約聖書の場合は39である。両方合わせた聖書全書の翻訳は長期にわたるため、協力者を母語翻訳者に育てたり、人数を増やしたりしても、新約聖書だけというところが多い。著者の携わったバーリッグ語プロジェクト¹は言語調査から新約聖書翻訳完成まで三チームが交代で30年を経た。

団体としては翻訳者、識字教育専門家、技術サポートの三分野のメンバーから成り、現地での三者のチームワークと派遣本国の支援者達によって完成に至る。コンピューターの使用により完成までの期間が大幅に短縮されたが、機械化できない場面がまだ残っている。国語、あるいは地域共通語による翻訳がある場合、それをたたき台にすることも可能だが、注意深いチェックが必要である。また、プロジェクト開始から完成まで長期にわたるので社会と言語の変化に伴い、印刷前に読者とその言語の未来を考慮して、大幅な改訂（語の選択や文体など）が必要とされる。

母語の文字化によって印刷物が出来てくることは、自己の確立と評価に少なからぬ影響を与え、社会生活の核である言語の見直しと保持が促されることが多い。

付記：国際ウイクリフ聖書翻訳協会は現地では SIL (Summer Institute of Linguistics) として受け入れられている。主に各国の文部省などからビザの発給を受け、現地で生活しながらのボランティア活動である。14世紀にラテン語から初めて英語に聖書を翻訳し、宗教改革の暁の星といわれたイギリスのジョン・ウイクリフにちなんで20世紀にアメリカでカメロン・タウンゼント達により創立された。パイク博士²が初期のころから言語学の面で貢献された。現在もアメリカ、カナダ、オーストラリア、イギリスなどのいくつかの大学で言語学のコースがSILのメンバーによって開かれている。

日本では37年前に日本ウイクリフが出来、国際ウイクリフの傘下で現在は30人を越えるメンバーがおもにアジア諸国に派遣されている。国際ウイクリフでは5000人以上のメンバーが70カ国以上で奉仕している。

注

1 バーリッグ語：フィリピン国ルソン島、山岳州、人口約5000人の話者

2 Pike, Kenneth L. 1912-2000、アメリカの言語学者・聖書翻訳者

執筆者紹介

日本ウイクリフ聖書翻訳協会元会員

2004年にバーリッグ語新約聖書翻訳を完成し帰国、現在宮城学院中学校非常勤講師